

獣医師の目
【牛】宮本 翔也

適切なビタミン濃度の

管理を

低カルシウム血症

先日、「低カルシウム血症」を発症した黒毛和種肥育牛（月齢25カ月）の診療をしました。搾乳牛では一般的ですが、肥育牛ではあまり聞かない病気だと思えます。

肥育牛は乾草摂取量や日照射時間の減少などでカルシウム代謝に重要なビタミンD濃度が低下することがあります。この症例でも、皮温低下、腸蠕動（ぜんどう）運動低下、歩様踉蹌（ほようそうろう）の症状により低カルシウム血症を疑い、血液検査を実施すると、ビタミンD濃度の低下が見られました。カルシウム剤に加えてビタミンDを投与し、治癒に至りました。

乳用種の中でも、特に「ジャージー」は低カルシウム血症を引き起こしやすく「ホルスタイン」では遭遇しないような症例に出合うことがあります。例えば、朝には元気

だった乾乳前のジャージーが下痢をしただけで、夕方には起立不能になったことがありました。それくらいジャージーは発症しやすいです。この症例は、ビタミンAの欠乏に伴い腸管の粘膜機能が低下したことによる、カルシウムの吸収阻害が要因と考えられました。肥育牛にも起こりうるので、適切なビタミンのコントロールが必要です。ビタミンDやビタミンA濃度を意識することは低カルシウム血症の予防につながります。

（N O S A I 岡山 北部基
幹家畜診療所技師）



ジャージー種の子牛